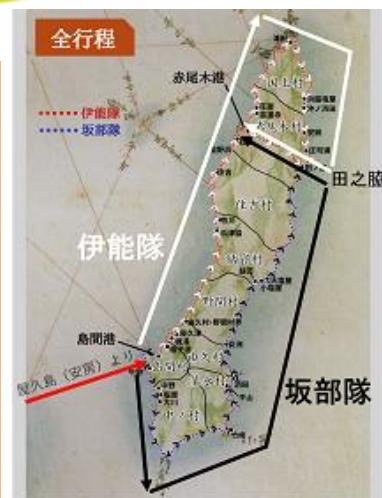


伊能忠敬の種子島測量（1） ～深夜の来訪者とその対応～

西之表市立図書館長 鮫嶋 安豊



伊能忠敬測量ルート

種子島家譜に「文化9年正月14日 縄を引いて、あらかじめ測量の試（予行演習）を為す。同年3月2日 家老上妻七兵衛宗愛をして屋久島に遣わして測量のことをうかがわしむ。同年4月18日 本府より、作事方見分役人らが来島し、東西に分かれ、村々を巡行し、天文者の旅宿を選定した。」とある。測量者伊能忠敬一行は屋久島測量を終えて西之表港を目指した。しかし、船団は北東の季節風に押されてしまう。「箱崎の遠見番所は荒れた南西の海のかなたに船灯を探すが一向に現れず、石寺海岸沖に数十艘の船灯を発見したのは夜8時過ぎの頃である。」

しかしその喜びも束の間、船灯は次第に小さくなり消えてしまう。そして急遽島間港に入港したのは、4月27日夜10時頃であった。

翌日暁、島間村からの急使が赤尾木城に「御用船が島間港へ入港した」ことを告げた。御用船には幕府から伊能忠敬を中心とする使者16人、薩摩藩役人91人が乗船している。些細な落ち度も許されない幕府勅命の大事業である。22代島主久照公は次のような達書を送っている。「公儀よりの事業であるからといって、恐れることなく無事測量を終えるよう心掛けること、種子島屋敷勤め（鹿兒島）、大阪への米穀の繰り上げのこと、田畑の手入れのこと、特に測量隊への対応は不行き届きがあっては恥辱と考えるので、在島の家老、物奉行、用人は、万全の処置をせよ」と。赤尾木の役人たちは島間への突然の入港に、夜明けを待たずに大移動を始めた。深夜に百余名を乗せた薩摩藩の御用船8艘と種子島家の台所船2艘、屋久島番所調達の引き船20艘、総勢30艘が舞い込んだ島間港は天地を覆すような大騒動となった。（次号へつづく）

近現代部会
報告

近現代部会では、慶應4年（1868）1月に始まった戊辰戦争から、太平洋戦争が昭和20年（1945）に終わるまでを「近代」とし、大戦後を「現代」として編さんします。近代史は昭和46年3月に発行された『西之表市百年史』をベースに再編集しています。今から50年前には、コピー機、ファックス、インターネットや図書館機能も現在のように発達しておらず、当時の資料収集に携わった方々のご苦勞が並々ならないものだったと想像できます。

明治38年に海軍水路部が発行した海図データを東北大学附属図書館から入手できました。そこには、西之表湾の詳細や郡役所と学校の位置も記載されています。馬毛島の詳細な海図には、最高地点の島中央部の岳之越が「225」と記されており、フィート換算すると現在の標高に近い値となっています。

初代熊毛郡長の牧野篤好が種子島時代に記したとされる手帳を、静岡県菊川市にお住まいの牧野家の方から拝見させていただけることになっていますが、この件はコロナ禍でお訪ねできておらず、これからです。



連合軍の九州上陸作戦、その直前に計画されていた種子島上陸作戦は終戦によって実行されませんでした。種子島全体で沖縄戦のような地上戦闘を展開するために作製された米軍の精密な上陸用地図は、東京都北区立中央図書館から掲載許可をいただきました。大戦前の生活経験や記憶を持っている方々のお話は益々貴重になってきています。この機会に最大限収集して記録していくためにも、市民皆様のご協力をよろしくお願いいたします。

<近現代部会:奥村 学、森 友和>

令和3年9月27日発行 第6号 [発行] 西之表市 [編集] 企画課 歴史文化活用係
〒891-3193 西之表市西之表 7612 番地 電話 0997-22-1111 (内 280) FAX 0997-22-0295



西之表市史編さんだより

中世部会

新出の日隆筆曼荼羅について

栗林 文夫

2021年3月、西之表市国上にかつてあった本法寺に伝わった資料の調査を行いました。これまで門徒の皆さんが大切に守ってこられた宝物で、それを現在は河本家が管理しておられます。本法寺は、元禄2年(1689)成立の『懐中島記』によれば、創建年代は不詳、西之表の本源寺末寺で、寺領は2石でした。

調査に伺った河本家には曼荼羅が三幅ありましたが、中でも享徳4年(1455)3月上旬の日隆筆の曼荼羅が目されます。この曼荼羅を授与された人物は「僧」としか記されておらず、詳しいことはわかりません。

曼荼羅というのは漢字で書かれた本尊で、「南無妙法蓮華経」の題目を中心にして、諸尊を文字で配列しています。礼拝の対象でしたので大切に保存され、現在でも種子島や屋久島に伝来しています。日隆(1385~1464)は本門法華宗の開祖で、これまで彼の書いた曼荼羅は種子島では日典寺に二幅、日輪寺に一幅が知られています。



日隆筆の曼荼羅

これらの画像と比較してみると、この曼荼羅は日隆本人の筆と判断して差し支えないと思われます。但し、これが何時から本法寺に伝えられたのか分かりません。もしかすると、もっと後の時代に持ち込まれたものかもしれません。さらに、明治39年(1906)1月の柳田芳太郎証書には、この曼荼羅が伝来した由来が書かれています。それによれば、「明治初年の廃仏毀釈の時、この曼荼羅も焼き捨てられようとしていた。私は平素から深く仏を信じ、且つ名幅が灰燼に帰すことを歎き、村吏に許可をもらって窃かに我が家に蔵して今日に及んだ。後世の子孫は永く伝えて我が家の珍（宝物）とせよ」とあります。

廃仏毀釈をくぐり抜けて現在まで伝えられた中世・近世の仏教資料（仏像や経典など）はいくつもありますが、その謂われを書き記した史料は少なく珍しいと思います。その他、宝暦6年(1756)の手書きの法華経なども残されていて、貴重な史料が伝えられていたことが明らかになりました。

先史部会

一寸の土器にも…

眞邊 彩

皆さんは、『圧痕（あっこん）』という言葉聞いたことがあるでしょうか？

圧痕とは、土器を作る際に粘土に入っていたタネやムシなどが、土器を焼成する時に焼け落ちて、型だけが残ったものです。遺跡から出土した土器を観察すると、丸や細長い形の凹みが見つかることがあります。この凹みにシリコーン・ゴムを流し込み、立体的に復元することで、凹みの原因が何だったのかを調べることができます（この調査を、圧痕調査と呼びます）。これまで、西之表市をはじめ、種子島や屋久島で何度か調査を実施してきました。また、西之表市史を機に調査した遺跡でも、たくさんの圧痕が見つかってきています。安城に所在する三本松遺跡や長迫遺跡では、約1万年前の縄文土器から、コクゾウムシの圧痕が見つかりました。三本松遺跡の圧痕が見つかった時には、“世界最古のコクゾウムシ資料”としても話題となりました。当時、コクゾウムシは縄文人たちが食べていたドングリの害虫であったとされています。さらに、圧痕ではカラスザンショウという植物のタネも見つかりました。カラスザンショウの実には、ムシが苦手な成分が入っており、当時の防虫剤ではないかと考えています。

圧痕調査の成果から、縄文人がドングリを食べにくるコクゾウムシに困って、虫除けにカラスザンショウを使った、というストーリーを描くこともできます。このように、小さな土器の破片をくまなく探すことで、昔の人々の生活の新しい一面を発見できるのが、圧痕調査の魅力です。小さな土器も、歴史を語る貴重な資料なのです。

三本松遺跡で見つかったコクゾウムシの圧痕は、鉄砲館に展示されています。ぜひご覧ください。



コクゾウムシ圧痕

自然部会

菌類の調査をしています

酵母菌^{こうぼきん}やかび^{きんるい}・きのこなどの菌類は、私たちの生活になじみ深い生き物です。

酵母菌はパンやワイン・ビールなどの製造に欠かせない微生物ですし、かびは嫌われ者ですが、かつお節・味噌^{みそ}・醤油^{しょうゆ}・チーズなどの製造に利用され、抗生物質ペニシリンの材料となるなど生活に役立っているものもあります。シイタケやエノキタケなど食卓にのぼるきのこも菌類の仲間です。菌類は一生のほとんどを土の中や枯れ木・倒れた木・腐った落ち葉などで、とても小さくて細い糸状の細胞^{きんし}（菌糸）や仲間を増やすための小さな細胞^{ほうし}（孢子）の状態^{ほうし}で過ごすため、存在を確認することは容易ではありません。きのこの多くも目に見える期間が限られており発見は偶然に左右されます。そこで、調査対象は肉眼で発生が確認できるきのこに絞りました。

西之表市ではこれまできのこの生態に関する本格的な調査が行われず、いつ、どこに、どんなきのこが発生するかはほとんど知られていません。今回の調査では、小笠原諸島や八丈島などでグリーンペペと呼ばれ、観光資源として活用している発光きのこヤコウタケの生息が確認できました。野生のナラタケやヒラタケなどの食用きのこも見つかりました。一方、身近な公園に猛毒をもつドクツルタケの仲間が発生することも分かりました。市民の皆様はきのこの多様性とその魅力を知っていただくため市内全域で菌類の調査をしています。



6月 安納の山中で（ヤコウタケ）

黒江 修一

自然部会

西之表市の大地

私の担当分野は地質で、種子島の大地や地形がどうしてできたかを調べています。西之表市を含めた種子島・馬毛島の土台は、約 4,000 万年前の遠い昔に、

海溝という深い海にたまった泥や砂が固まってできた地層です。泥や砂の層はその後の地殻変動で持ち上がり、陸地をつくり種子島の原型になりました。その後も種子島の一部は海になったりして、入り江などもできました。今から 1,000 万年前頃には浅い海が広がり、主に南種子を中心に化石を含む地層がたまりました。時代が飛んで 130 万年前頃には北から多くの動物がやってきて、西之表象と愛称される



住吉形之山のゾウ化石看板

象も棲んでいました。象は死んだ後、住吉付近の入り江に運ばれ、当時の魚・カニなどと一緒に海底の泥に埋まり、やがて化石になりました。そして長い年月の間には再び陸地になり、住吉の形之山で私達が目にするようになりました。

さて、話が変わりますが、種子島にも多くの火山噴出物があることをご存知でしょうか。種子島は火山島ではないので、火山噴出物は他所からきています。火山噴出物の中には「西之表火砕流

（テフラ）」と呼ばれる約 10 万年前のものもあります。また、はるか遠くの始良カルデラから噴出した、約 3 万年前の AT 火山灰と呼ばれるものもあり、遺跡の発掘では時代を知る物差しとして活用されています。

ところで皆さんはあちこちの道路脇などで、石ころが積み重なり脈になっているのを見たことはないでしょうか。これは約 7, 300 年前の地震による液状化の跡で、地下にあった石ころが噴き出した跡になります。このように種子島には様々な時代の地層、火山噴出物がたっていますが、分布や重なり方を調べると大地の生い立ちが分かってきます。それらの成果を十分に取り入れ市史を執筆する予定です。

成尾 英仁

古資料・写真のご提供 ありがとうございます。

まだまだ募集しています！ご連絡ください！



↑ S35 年馬耕試験（野邊まち子さんから）



↑ 栢之峯弓矢八幡縁起（長野健太郎さんから）

池亀伸二さん、大崎伸代さん、長野勝さん、阿世知亘富さん、中園由美子さん
西町自治会、中村虎義さん、下村太郎さんからも資料をご提供いただきました。
ありがとうございました。

校区史部会

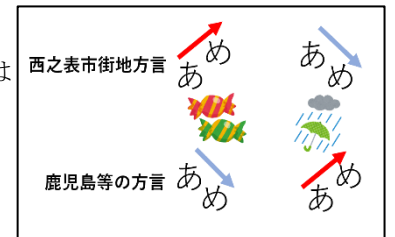
西之表市の方言 ～アクセントの特徴と記録調査の大切さ～

西之表市西之表で話されている方言（以下、西之表市街地方言）は、鹿児島県本土やお隣屋久島で話されている方言とは、聞いたときの印象が大きく異なります。そのため、単語を発音するときのアクセント（音の上げ下げ）がどのように違っているのか、多くの研究者が興味を持ちました。昭和 40 年代に行われた方言調査では、西之表市街地方言と鹿児島等の方言とでは、音の上げ下げが逆であると報告されました（右図参照）。平成 10 年に行われた調査でも、同様の結果が報告されています。

なぜアクセントが違うのでしょうか。これまでの研究では、西之表市街地方言は鹿児島等の方言のような形から歴史的に変化して成立したと考えられてきました。本当でしょうか？確かめようがないのでは？と思われるかもしれません。

しかし、この謎を解くカギを市内東部で見つけました。伊関や安納など市内東部で話されている方言の一部は、鹿児島等の方言と西之表市街地方言の中間的な特徴を持っていることが分かったのです。今後、市内全域の方言の仕組みを詳しく調べて比較してみることで、西之表市街地方言がどのように成立したのか、その歴史を明らかにすることができるかもしれません。

人間の骨や使っている物は後世に残りますが、方言は話す人がなくなると、その仕組みを調べるのが絶望的となってしまいます。方言の記録調査は、一刻を争う重要な課題なのです。 荒河 翼



アクセントの違い（飴と雨）

市史編さん事業の経過（7月以降）

- 令和3年7月28日 近現代部会聞き取り調査（喜志鹿崎灯台周辺の戦跡について）
- 7月31日 自然部会現地調査（へゴ自生群落周辺の植生ほか）
- 8月10日 第1回中世部会（現状報告、スケジュールの確認、執筆内容の協議）

今後の予定（10月以降）

- 令和3年10月 先史部会現地調査（遺跡から出土した遺物の実測等）
- 第1回市史編集委員会（現状報告、頁割や体裁について協議）
- 10～11月 第1回先史部会（現状報告、頁割や執筆内容について協議）